

新旧両毘婆沙論の一相違点

梶田善夫

すでに私は、今回と共通のテーマのもとで「新旧両毘婆沙論に於ける一・二の相違点について」(印仏研究第三十卷第二号)と題して発表を行なった。そこに紹介する「第一章、新旧両毘婆沙論教学の相違点から見られる両論の関係についての二例」は、カシュミール学派とガンダーラ学派としての両毘婆沙論の立場の相違を表わす最も際立ったものであった。さらにその相違点から言えることは、単なる教学上の相違を示す以外に、註釈書時代に入り両毘婆沙論は密接な関係の中で独自の教学の立場確立に各々務めていたことを物語るものであった。両論は、お互いの意見や考えを十分に聞き、確かめうる距離にあったこと。又、その場には寛容なる精神が満ちていたことも読みとれるのであった。この様な状況を念頭に置き、今回は更に別な相違点を取り上げ、カシュミール有部、ガンダーラ有部、各部派仏教間に窺うことのできる微妙な関係のニュアンスを分析してみたい。

新旧両毘婆沙論は、結蘊における九結の発智論本論の註釈中に、文中の「事」(大毘婆沙論)、「処所」(旧訳毘婆沙論)の語の解釈に説き及ぶが、この事(vastu)をまず自体事(svabhāva-vastu)・所縁事(alambana-vastu)・繫事(samyoga-vastu)・因事(hetu-vastu)・摂受事(parigraha-vastu)に分類説明し、その中の繫事により理解するとするのである。さらに他の五事を紹介し、(旧訳毘婆沙論は「復有説者」として紹介)、続く文中に「阿毘達磨諸論師」「犢子部」「譬喩者」の所繫事(samyoga-vastu)・能繫結(samyukta-kleśa)・補特伽羅(pudgala)に対する実有・非実有説の異説の紹介文が見られる。

大毘婆沙論

〔本論〕

有九結。謂愛結乃至慳結。若於此
事。有愛結繫。亦有悲結繫耶。

〔釈文〕

旧訳毘婆沙論

〔本論〕

九結。愛結悲結慢結無明結見結取結疑結
嫉結慳結。若処所有愛結繫、復有悲結繫
耶。若有悲結繫、亦有愛結繫耶。

〔釈文〕

於此十事、此中但依繫事作レ論。
不レ依餘九。

阿毘達磨諸論師言、所繫事是実、能
繫結亦実。補特伽羅是假。

犢子部説、所繫事是実。能繫結亦実。
補特伽羅亦是実。

譬喩者説、能繫結是実。所繫事是假。
補特伽羅亦假。

於此十処所中、依繫処所而作論。
犢子部作如是説、処所是假名法、無有定
体。結非假名。衆生非假名、各有定体。
阿毘曇者、作如是説。処所非假名。結非
假名。衆生是假名。
譬喩者、作如是説。結非假名有定体。処
所是假名、衆生是假名而(宋・元・明三
本、宮内省本は「無」)有定体。

この文章で述べられている大毘婆沙論の「所繫事」、旧訳毘婆沙論の「処所」は対象。「能繫結」「結」は法。「補特伽羅」「衆生」は主体なる言葉で置き替えることができる。これを図示するとFig. 1の様になる。だがこの場合、注意して見ると大毘婆沙論と旧訳毘婆沙論との間にいくつかの相違点を指摘することができる。まず、大毘婆沙論が、阿毘達磨諸論師、犢子部、譬喩者の順序で各論師を出すのに対して、旧訳毘婆沙論は、犢子部、阿毘曇者、譬喩者の順序になり、阿毘曇者と犢子部の順序に相違が見られる。又、旧訳毘婆沙論

	対象(所繫・處所)	法(能繫・結)	主体(補特伽羅・衆生)
大毘婆沙論	譬喩者 ↓ ○	○	X
旧訳毘婆沙論	犢子部 ○	○	X
大毘婆沙論	譬喩者 ↓ ○	○	X
旧訳毘婆沙論	犢子部 ↓ ○	○	X

Fig. 1

が阿毘曇者とするのに対して、大毘婆沙論は阿毘達磨諸論師と複数であることが指摘できる。さらに大きな相違点は、大毘婆沙論は犢子部の所繫の事を実有とするのに対して(、線の個所)、旧訳毘婆沙論の文を注意して読むと(、線の個所)、「犢子部作如是説、処所是假名法、無有定体。」として、まったく実有説を認めない逆の説明になっている。これは、大毘婆沙論自身

たことが推測できうることになる。

加えて先に引用した譬喩者の例は、内容的に北伝仏教に於ける上座部、大衆部の根本分裂を引き起こしたと伝説される大天の説話に類似することが指摘できる。周知の如く、大毘婆沙論第九十九卷引用の因縁は、マトゥラ国の商主の子として生まれた大天が、父の留守に母と交わり、母と共に父を殺し、パータリプトラに逃れた後、故郷の比丘に逢い、露頭を恐れこの比丘も殺し、さらに母が他の者と交わったのを見て、この母も殺した。この結果、仏教に帰依、阿羅漢として、大天の五事々を説いたので、当時の仏教界に大きな衝撃を与え、上座部、大衆部の根本分裂の原因となったのである。この大天の母が、大天にとり色々の女性になりうることから考えて、譬喩者の例話と共通の要素が指摘できる。

又、大天が主張する五事の「餘所誘無知 猶豫他令入 道因声故起 是名真仏教」の内、煩惱の漏失は無いが阿羅漢も夢で天魔に焼せられて、不浄の漏失を許す第一事の「余に誘わる」は、思想的に旧訳毘婆沙論の理解する犢子部説、譬喩者の説く「境の実体無し」に極めて類似した考え方と言わなければならない。この様に大天の問題と今回検討した新旧両毘婆沙論の相違との間に関係を見出すことができる。とすれば、初期仏教解明のさらに大きな問題へと展開する可能性を秘めていると言うことができるだろう。

『釈浄土群疑論探要記』の書誌学的考察

村上真瑞

『釈浄土群疑論探要記』について、現在様々な書誌学的研究成果が、出されているが、版本写本について、注釈書も含めて、現在知り得るものについて、実際現物を確かめることによって、その存在を裏証してみたい。

そこで『釈浄土群疑論探要記』一四巻について、最も新しい研究成果を紹介されている『日本仏教典籍大事典』（昭和六十一年十一月刊）によって考察してみよう。

『釈浄土群疑論探要記』（しゃくじょうどくごんぎろんたんようき）一四巻。一（中略）一（初版明治四二年刊）のものは後者の本と手沢の善本を校合し、再版本ではさ

らに大鹿愍成師の手沢本と再度校勘されている。「末注」「探要記考」一四巻（正大・谷大）「所載」浄全6。「参考」浄全21（解題）、浄土宗典籍研究。「金子寛哉」

と示されるところにより、現在における最新の『釈浄土群疑論探要記』の研究情報を理解することができるのである。因みにここにおいて、版本は寛永十一年と、二十一年との二本、また、末書については、『釈浄土群疑論探要記考』一四巻が存在することを確かめることができるのである。

次に『仏書解説大辞典』（昭和十年刊）によると、

寛永一一刊（谷大、宗大・一二九）寛永二二刊（正大・一五三一・二七三―二七四）（龍大、二〇三・二七）

と記され、また、『国書総目録』（昭和五十二年刊）によると、

『釈浄土群疑論探要記』一四巻

現存、撰者道忠（一弘安四、AD一二八一）

写本、大正、版本、大谷、京大、早大、大正、東洋大哲学堂、龍大、逢左、無窮

平沼、活字本、浄土宗全書六巻

と記されているように、これらの目録によると、写本が大正大学にあり、版本には、寛永十一年刊と、寛永二十一年刊との二種類があることが理解されるのである。さて、これ以外の版本として、『佛教大学図書館所蔵和漢書中浄土宗学関係書籍目録稿』の中には、

釈浄土群疑論探要記 十四巻 道忠 宝曆十三 吉野屋権兵衛刊 天一四八

と記されるように、宝曆十三年版の存在が見出されるのである。これによって、版本は、全部で三種類あることとなるのである。

次に、『釈浄土群疑論探要記』の末書について考察してみたい。「仏書解説大辞典」によると

釈浄土群疑論探要記考 十四巻 存 写本（谷大、宗大・二六一〇）

と記され、『国書総目録』によると、

釈浄土群疑論探要記号 十四巻 現存写本 大谷

と記され、大谷大学に『釈浄土群疑論探要記考』という名称の『釈浄土群疑論探要記』の末書が存在することが判明した。また、前述の『日本仏教典籍大事典』によると、『釈浄土群疑論探要記考』は、大正大学にも存在することが記されている。

そこで写本版本すべて実物にあたって、その实在の確認をしてみたい。まず大正大学図書館において、写本の『釈浄土群疑論探要記』を閲覧したところ、閲覧カードには、確かに「写本 群疑論探要記 一五三一―二七五」と記されていたのであるが、